
木苺パニック！

上田サマナー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木苺パニック！

【Nコード】

N9945W

【作者名】

上田サマナー

【あらすじ】

兵庫の田舎に電車を撮りに来た伊藤ミナオと、ストロベリーパニックの月館千代が繰り広げる物語！！

出会いは播州赤穂！（前書き）

ストロベリーパニックが播州赤穂が舞台ではないので悪しからず？

出会いは播州赤穂！

私、伊藤ミナ才はどこにでもいる格好も普通の青年で20歳だ。

今、博多駅から新幹線で関西方面に向かっていた。

兵庫近郊の田舎で、たくさんの電車を撮るために！

「今日は、神戸近郊で沢山の電車を撮るぞ！なんせ相生駅や播州赤穂駅とかは生まれ変わる駅だからな！」

なに言ってるのか…

なんだかんだで、、無事に新幹線は相生駅に着いた。

ここから始まる撮り鉄の旅！ミナ才は心躍った！

「着いたぜ！相生駅！！」

まず、相生駅を下り、在来切符を買い播州赤穂駅に向かった。

途中は223系に乗った。

「さすが西日本の車両！新快速とかいいねえ」

そして無事に播州赤穂駅に着いた。

「早速、飯にするか！」

まず、飯にするようだ。

「関西ゆうたら、やはりタコ焼きだよな。播州赤穂駅周辺にもあるだろう」

早速探し始めた。

なんとかタコ焼き屋を見つけ出し、タコ焼きを買った。

「買った方がいいが…、タコ焼き食う場所がないやん……」

播州赤穂駅から離れ、いろいろと探し回った。

しかしなかなか見当たらない…

すると公園の門みたいな入口があった

「なんだこんなとこに森でおおわれた公園があったんか…よかった！公園で食べたかったから」

ミナ才は早速その門にタコ焼きと荷物を持って入っていった。

しかし、このことがミナ才を物語へと巻き込んでいく…！

百合

私は、タコ焼きとキャリーバックを持って、公園？森？の中をウロウロとしていた。

その時…

「あ、ベンチ発見や！しかも、前には池か…なかなか自然豊かやなあ…。」

ミナ才は、疲れたため息をだし、キャリーバックをベンチ脇に置き、ゆっくりと座った。

「ああ…疲れた…。播州赤穂駅まで長かったなあ…。」
タコ焼きをほおばりながら独り言を言った。

食べ終わると同時にウトウトと眠ってしまった。何時間が過ぎただろうか…

夢から覚めると、自分の顔を恐る恐る見る、小学生…？いや中学生？の様な風貌の今どきのオカッパの髪型をした美少女が居た。

「わあ！ビックリした！なんだ君は！？」

「そそそ、それはこちらの台詞ですよ（汗）。」

彼女はさらにオドオドして言った。

ミナ才は、寝る前までの事を思い出して、言い放った。

「いや、ここで昼ご飯たべとったんよ。ここ、公園だろ？別に寝とったっていいやないか！」

「ここは、公園ではありませんよ！（汗）聖ミアトル女学園の敷地内ですよ！」

「聖ミアトル？マジかよ？（汗）てか、私が女学園の敷地内に居たら変態と間違われるやないかい！」その時、奥の草むらからも音がした。

「ヤバいです！（汗）とにかく私について来て下さい！」

「ああ、その方が良さそうだな（汗）。」ミナオは、その小さな美少女の小さな手を引っ張られ、その美少女について行った。

途中、草むらを書き分けて行く最中に、遠くに見えていた池のほとりですぐ女学生同士がキスしているのを見てしまった！

ミナオの脳内（わ！百合つつつか、同性で…？）

ミナオは呆気にとられたままその美少女に引っ張られて行った。

千代（前書き）

第3話です？

播州赤穂駅をY o u T u b eで見で、インスパイアしてます？

千代

僕は、呆気にとられたまま僕の手を引つ張って行つたオカッパ美少女の部屋？に連れられた。

「ハアハア…疲れた…。まったく…なんなんだよ。」ミナオは息切れしながら言った。

「ごご、ごめんなさい（汗）。誰かにばれるとマズイと思ったから。」

オカッパ美少女は、泣いていた。泣いていたと言ってもオドオド泣きの方だ。

「泣くなよ。わかつたよ。ありがとな！」ミナオはオカッパ美少女の頭を撫でながら言った。

「いえ、ありがとうございます」（泣）。私でも人の役に立ちました〜！」

「は、はあ…。よかつた…。なあ（汗）ありがと。ところで君、名前は？」

「月館つきだて 千代ちよひと申します。聖ミアトル女学院一年花組です！貴方は…？」

「ああ、俺は伊藤ミナオ。まあ、福岡からちよいと旅行に来たといつかそんな感じだな…。てか、君…月館ちゃんは中学生？」

「千代でいいですよ。私もミナオさんと呼びますね。はい。私は世

間的には中学生一年生です。聖ミートルは中高一貫なので、世間的な高校一年生は四年生と呼ばれております。」

千代は、丁寧の説明してくれた。

「てか、礼儀正しく、丁寧な言葉口調だね…？」ミナオは不思議そうに聞いた。

「はい、ミートル女学院は格式高い、いわゆるお嬢様学校でありますから。私も幼稚園から通っております。」千代はテキパキと簡単に説明してくれた。

「なるほどね…。ところで僕はどのように帰れ…。」ミナオが言う途中で部屋のドアから（ドンドンドンドンドン）と、聞こえた。

二人「！？（汗）」

やるしかない！（前書き）

第4話

播州赤穂駅の入線メロディー好き？

やるしかない！

(ドンドンドンドン)

二人は背筋が凍った。

「ヤベー…誰か来る。」ミナオは恐る恐る千代に聞こえる程度に話した。

「ととと、とりあえず私のベッドの下に隠れてくださいっ！（汗）」
千代は必死に言った。

「わわっわかった！」ミナオは、こう言いながら慌ててベッドの下に自身の荷物は、たんすに隠し、ベッドの下に入った。

千代はミナオが事を済ませた事を確認すると、恐る恐るドアを開けに行った。

「はっ…はい…どなたですか…？」

「ヤッホー！千代ちゃん！」元気ハツラツとした声。

「渚砂お姉様ですか？」

「そうだよー！」相手は、千代の先輩であり、現在聖ミアトル女学園4年生の渚沙という女性であつた。

「渚砂…？また厄介なのが来たな…（汗）。お姉様って…、先輩さんか…？」ベッドの下で息を殺して言った。

「なっ、渚砂お姉様っ！ なななっ 何の用事ですかっ…？」 かなり動揺した感じで言った。

「何って…夕御飯の時間だから誘いに来たんだよ…？」

「ああっ！ そうですよ！ アハハ。」 千代は、開き直った感じでいった。

「千代ちゃん？ 大丈夫？ 今日は、おとぼけさんだね。」

「すすっ、すいませんっ！（汗）」 千代が冷や汗をかきながら謝ったその時、渚砂が感づいたように聞いた。

「千代ちゃん…？ 部屋ん中…男の子とか来てない…？」

「ビクッ（*ー*；）」

千代とミナオは同時に驚き、息をのんだ。渚砂はじっと千代を見ている。

「男性がこの学校に居るわけじゃないですか…！ 男性でいるのは、警備員か先生くらいでしょう。」 千代はこれ以上ツッコまないで的なオーラを放ちながらいった。

「千代ちゃん…。」

前髪を下に垂らしたアニメで見るような、顔上半分を暗くして言った。

しばらく沈黙が続く。

「ヤベー…。感づかれたか……………！」 ミナオは、死を確信して思った。

二人に緊張が走る。

「だよね〜（笑）アハハ〜。ごめんね〜。」

渚砂はかなりウケていた。

千代&ミナオ「!?!」

「渚砂お姉様は、私をからかったんですか〜?」

千代は驚きの表情で聞いた。

「うんWごめんね〜。でも千代ちゃんかわいかったよ〜!」渚砂が言った。

「もう〜!お姉様ったらあ〜。」

ミナオ「たっ助かった…。」ミナオの心は和らいだ。「しかし、なんて先ば…お姉様なんだ…。勘がいいにも程があるぜ…。」かなり安堵してまるで、難関大学受験に合格したみたいと言った。

「とにかく、千代ちゃんご飯食べに行こ!」

「はっ、はい!お姉様。」

千代は、ミナオにどのように学校から脱出すればいいか提案しないうちに部屋を渚砂お姉様とやりに連れられでいてしまった。

ミナオはベッドの下から部屋を覗き込み、誰もいない事を確認すると外に出てきた。

「とにかく、なんてかして脱出しなくては…。完全に変態になって捕まってしまう!しかも13歳の女の子の部屋にいるという最悪の事態というね…。」

ミナオは、部屋の窓から外を見ながら
「やるしかない！」と思いながら言った。

脱出計画（前書き）

第5話です

まさかの展開に（笑）

脱出計画

ミナ才は、自分が勝手に迷い込んでしまった女学園からなんとか脱出したいと企んでいたのだが…。

「なにも思いつかねえ…。」「ミナ才はため息交じりに言った。

「第一に、ここは女学園の敷地内…。女学生がたくさんいて、男性の俺が見付ければ大変な事になる。周りは全て女学生に囲まれてるから逃げ場がない…。どないしよう…。」「ミナ才は途方に暮れた。それもそうだ、何せ女学園の中での男性は非日常な存在だからだ。見付ければ、警察行き確定だ。

ミナ才「まあ、運良く優しい千代ちゃんに出会えたのは正解だったな…。」「ミナ才は、安堵のため息交じりに思った。

「千代ちゃんには、悪いがさつさと自分で脱出するか…。いつまでも千代ちゃんに迷惑かけられないし…。」「ミナ才はそう言つと、メモ紙とペンを出して、置き手紙を書いた。

内容は、、、

千代ちゃんへ

助けていただきありがとうございました。
私はここから脱出するので心配しないで下さい。
また、今度は学校外で出会いたいですね。
さよなら＊

伊藤ミナオ「よし…、書けた。だが最後の方はナンパみたいになつたなあ…。」またまたため息交じりにミナオは言った。

ミナオは、置き手紙を机の上に置くと、荷物をまとめて逃げる準備をした。

「千代ちゃん…悪いが俺は帰るぜ…さらば！」などと独り言をいいながら部屋の出口の扉を開けた。

赤色の絨毯が敷かれた、明治時代の日本の洋館風な廊下には静けさがたちこめていた。

「誰もいないか…。まあみんな夕食時だからな。」ミナオは安堵して言った。

そう言うミナオは、外部に気付かれないようにそつと部屋を出た。

ミナオ「女学園なら一人くらいお持ち帰りしたかったが…、状況が状況やな。」

ミナオはため息を出しながら思い、どこへ繋がるとも分からない廊下を歩いていた。

すると、前に扉が見えて来た。

「なんだ…？この扉は？」怪訝そうにミナオは思った。

デカイ木で出来た洋館にありそうなベタなデカイ扉があつた。

「つたく、こんな無駄な扉造りやがつてゝ！」

ミナオは少し苛立ちをぶつけながらその扉を開けた。

「…？！…！！！」

次回へ
...

逃走（前書き）

第6話

いよいよ本腰だ（笑）

逃走

苛立ちをぶつけ洋館にありそうな大きな木の扉を開けた……

開けたその時……！

ミナオ「！？」

なんと、食前の祈りを捧げている女子学生達がまたもやでつかいお屋敷にありそうな長机に40人程度いた。

ミナオは硬直したが直ぐに立ち直り、次のようにいった。

「あつ……あ、どうも……。W

自販機の補充に来ました。コ コーラの者です……。部屋を間違えました。失礼します。」

そついうと、素早く逃走した。

「なつ！？まつ待て！」

青髪のシヨートヘアの生徒会長風の女性が言った。

机に座ってた生徒たちがざわつく。

「このいちご舎に自販機はないわよね？」

「あの人何？」「男の人じゃない……。」

千代はこの状況でかなり動揺を抑えていた。
千代「ああ……、マズイです……。とにかく、私が動揺していることは悟られないようにしなくてはです。」

そんな千代の意思に早速飛び掛かってくるように話かけてくる女性
がいた。

「千代ちゃん。怖いねえ。あれ多分、コ　コーラの社員を名乗っ
ただただの変態だよ。」話かけたのは、千代の憧れのお姉様である
『渚沙お姉様（本家主人公）』である。

「そそつ、そうですね！全く、物騒な世の中ですよね。」千代は
必死に動揺を殺しながらしゃべる。

千代「やばい！どうしたらいいのですか？（汗）」

「やばい逃げなあかん！警察に捕まりたくはない！」ミナオは運動
はあまり得意ではないが必死に逃げた。

「あの生徒会長っぽい人が追って来ている！」外に出てもひたすら
逃げた。すると、ある湖にでた。

「ここは…？」なんと、最初にミナオがタコ焼きと共に昼飯を食べ
に行きた湖の辺にきた。

「と、とりあえず茂みに隠れるか。」とミナオは言うと、茂みに隠
れた。

ミナオが隠れて数秒して後から追いかけて来た生徒会長らしき髪の
短い女性が来た。

「くそ、逃げられたか…。仕方ない…。」

彼女はそう独り言を呟くで行ってしまった。

ミナオ「ふうく助かった。」ミナオは安堵した。
しかし油断は出来ない

学校内部に不審者（男性）がいると分かれば誰でも警察に通報し逮捕するため搜索するだろう

それが夜でも構わずに：「とりあえず逃げなきゃ。この学校は丘の上にあったはず。ならば、下って行けば必ず出口だ！」

ミナオはそう言つと、坂を下っていった。

しかし1分ほど下っていった際に、突然前に人影が現れた！

「ちょ、おまつ！」ミナオは足で必死にブレーキをかけながら言った。

髪の毛の長い、銀髪らしき女性が立っていた。

こいつは一体…？

逃走（後書き）

次回予告

いよいよ来た！！

ついに次回！！！！

あのアストラエアの丘の女王降臨！！！！！！

（北斗の拳次回予告風）

女王（前書き）

第7話

来た？？？？？

女王

ミナオが逃げた先には、銀髪の美女が立っていた年齢からすると18か……？

ミナオ「18ゆったら最上級生やないか」

そんな事を思っているとその銀髪美女が話し掛けてきた。「貴方は……？」

とても丁寧な口調だが何かとてつもない口調で言ったようにミナオには聞こえた。

「わつ、私は……コーラの者……！？」

者を言いかけたと同時にその銀髪美女は言った。

「貴方……月館さんのところに迷い込んだ福岡の男性でしょ？」

「なっ……!?」ミナオはビクリして言った。

ミナオ「何故わかった……？」

馬鹿な福岡出身とは一言も千代ちゃんには言っていない……？馬鹿な……？千代ちゃんがチクった訳ではないか……」ミナオはかなり驚いた顔で呆然と立っていた。

「無理もないわね。今警備員と生徒会に追われて四面楚歌状態なんだから。」銀髪美女はため息をつきながら言った。

「分かってるならゆうなよ…。俺はただ昼ご飯を食べるために公園だと思ってこの場所に入っただけだ！」ミナ才は怒り口調で言った。

「もういいよ…仲間に伝えるなら伝えるよ…。どうせ今逃げてもこの馬鹿でかい学校の敷地からは出られないんだからな…。」ミナ才はあきらめ口調で言った。

すると美女はくすつと笑いある提案をした。

「わかったわ。ならここは見逃してあげるわ。」

「なに!?!」

「ただし、条件があるわ。」

「条件…?なんだよ?」

—————

「静馬!いた!探したのよ!」青髪の生徒会長風の女性が言った。
「あら、渚砂じゃないのね残念」。深雪^{みゆき}ね。「銀髪の女性が言った。

どうやら銀髪美女は静馬という名前で生徒会長は深雪というようだ。
「渚砂じゃないわよ!大変よ!貴方が食事前に出てから不審者が学校に侵入して食堂に現れたのよ!」

何か怪しい人物は見なかった!?!」深雪が静馬を問い詰める。

「いや、知らないわよ?」だって私部屋に居たんだし。「静馬はナチュラルに答えた。

「そうよね…。今夜は厳重に警戒しないと、不審者は男だから生徒

に何をするかあ。」深雪はため息まじりに言った。

そして続けてこう言った。

「あなたも、この学校達の象徴でもある。元エトワールで元女王み
たいなものだからしっかりしてよね！いい？」

「はいはい。わかったわよう。女王みたいに気品を保ちますよう。」
静馬は軽い口調で言った。

女王（後書き）

次回予告

なんとか土壇場を助けられた？ミナ才！！！！！！！！

しかし、**静馬からの条件が！！！！！！！！！！**

その条件とは！！！！！！？

そしてミナオの運命は？？？？？！！！！！！

北斗の拳次回予告風

第8話 条件（前書き）

JR西日本さんは決してこんな会社じゃあないよ（笑）
まあ空想は夢溢れていいんだよ（笑）

第8話 条件

さかのぼり、静馬とミナオのシーンへ、「条件だど…？」ミナオは疑心丸出しで言った。

「条件はね…。」静馬はゆっくりと言った。

ミナオ「ゴクッ…」

「今度の私と渚砂とのデート旅行に使う電車を運転してちょうだい。」

「……………！？」

ミナオは頭が白くなった。

「…。わからないの？運転するのよ。」静馬はナチュラルに言った。

「お前…、何言ってるのかわかってるのか…？運転免許もないし電車だつてないのに、運転なんか出来るか！常識がないにも程があるぞ！」ミナオは真剣に言った。「大丈夫よ。JR西日本さんには許可をとつてあるし、車両も借りたわ。」またまたレンタカーを借りた感じにサラッと静馬は言った。

「許可…、レンタル…ってあんたねえ…。」もうなんだよコイツみたいな目で見ながらミナオは言った。

「大胆、貴方は鉄道マニアなんでしょ…？」

「マニアっちゃあマニアなのかも知れないが…。」

「ならオツケー。どうせ電車でGOとかしたことあるんでしょ？」

ミナ才は「うつ、うん…」と言いながら頷いた。

「なら簡単よ。はい、これ資料ね。デート旅行は二週間後だからね。」

「まっ、まて！」ミナ才は焦って言った。

「何よ…？」

「二週間って…私を何日監禁つか、束縛するんだ？！私も福岡に帰って学校や家が…！」

「大丈夫よ。私の家、花園家をもってしたら大学の単位も福岡にしばらくいなくても大丈夫よ。このヘリコプターを貸すわ。もちろん運転手付きでね。播州赤穂から福岡の貴方の地元まで1時間だからいつでも帰してあげるから心配しないで。」

「まっ…マジかよ。」

ミナ才はもう頭が真っ白でこんがらがっていた。「とにかく、私の願いを叶えてくれるなら、三週間後には解放させてやるわ。いやなら警察に今貴方を突き出すだけよ。」

静馬は真剣に言った。

「つつ…この銀髪女…」

わかったよ…。「ミナ才は観念して言った。

「ありがとう。」初めて静馬が笑顔をみせてくれた。

くしくも、ミナ才は一瞬その笑顔にドキドキした。「さっき言いそびれたからまた説明するわね。」静馬は続けて言った。

「二週間の間に資料と、実技訓練を今度の土曜日にJ R西日本さん

から運転手と呼んでるから学びなさい。まあ日頃は資料をよく読んで覚えてちょうだい。」

「あつ…ああ。」ミナオは言った。

ミナオ「ひええ。マジかよ。ガチ運転を…？」JR西日本は大丈夫かあ…？」

「もちろん報酬はあげるわ。40万円ね。なにか質問は…？」

「40万もいいのか…？かなり待遇もいいが。」ミナオは怪訝そうに言った。

「いいわよ。かなりのリスクを背負わせているんだしね。」静馬は言った。

「わかったよ…。警察に突き出されるよりはましかな…。でも、その間の私の居場所は…？」

「ふふふ。月館さんのお部屋よ。」静馬は言った。

「！？ マジか？！大丈夫か！？」ミナオは驚き丸出しで言った。

「月館さんには私から後で言うから、貴方はこころ辺にまだ隠れてね。あつ、後私の名前は花園静馬ね。じゃあね。」

そついうと、静馬は去って行った。

ミナオ「え…？！また隠れるのかよ！？静馬さん…。」

ミナオの運転士養成？が始まった。

第8話 条件（後書き）

次回予告

ミナオ「なんで、皆さん播州赤穂という関西圏に住んでるのに関西弁話さないと？（博多弁）」

千代「それは…私たちは、お上品な気品を保たないといけないからですよ。」

ミナオ「お上品なお方でも関西弁話すやつは沢山おるけど…？」

千代「もう知らないです。」（泣）

ミナオ「もう深く追求しないよ…。」

第9話 養成開始（前書き）

これはフィクションなり~~~~~！

第9話 養成開始

朝

「ああ！」ミナ才は、驚いたように起きた。

「ああ、びつくりした…、225系が西鉄で走って西鉄を我が物顔にしているとんでもない夢をみた…。」

すると横から、小柄な女性が恐る恐る話し掛けてきた。「あの…大丈夫ですか…？伊藤さん。」

声の主はしばらくぶりの月館千代ちゃん。この学校に迷い込んで最初に出会った人物だ。

「ああ、大丈夫だよ。さあ勉強勉強！」

ミナ才はそう言うのと、部屋の机に向かった。

「千代ちゃんありがとう。さあ運転士養成！運転士養成！」そう言うって、ミナ才はシャーペンをはしらせた。

15分後……………。

ミナ才はペンを置き、一言…。「ってゆうか……………。なにしてくだ俺……………!?」かなりストライクなツツコミをした。

「てか、ヤバくね…？大丈夫か俺は電車を走らせて…？JR西日本さん！大丈夫か…？」

千代が言った。

「落ち着いてください！伊藤さん！（汗）」

「そうだよなあ……。これ断れば刑務所行きだし、一応、報酬貰う予定だしなあ。」「ミナオは観念したように言った。「でも……なんか……大丈夫かあ？」「JRと国土交通省は？」」「ミナオは続けて言った。

「大丈夫ですよ！」千代は元気良く答えた。

ミナオ「その自信はどこからくるんだ？」

そして、土曜日……………

「えー、私がJR西日本の北陸支社から派遣された栗野原です。よろしく。」と、JR西日本職員の栗野原さんが言った。見た目はまどきの30代のお兄さん……？おじさん……？で、少し大柄である。

「あの……ほんま大丈夫ですかね……？」ミナオは栗野原さんに近づき、小声で言った。

「ああ、大丈夫ですよ。」栗野原さんは普通に言った。

「大丈夫ですよ！ミナっちさん！」千代は元気よく答えた。

「ミナっちって……（汗）」

—————そして、栗野原さんのJR西日本の事業車でアストラエアの丘の上にある、この女子校から一番近いJR西日本の駅である「播州赤穂駅」に着いた。

この播州赤穂駅がある赤穂市は兵庫県の最西端付近にあり、すぐそこは岡山県である。

この駅は大阪、京都、米原方面の新快速が出ていて、（新快速とは、快速より更に早い近郊電車）大変便利！少し行ったら、相生駅や姫路駅があり、新幹線にも乗りやすい！

「ああ…ここは、赤穂なだけに赤穂浪士のあの舞台の街か…。」ミナオは言った。

「はい！ここは忠臣蔵の舞台となった街ですね。まあ私もよくわからないので、詳しくは Wikipedia でね。」千代は元気よく言った。

「わからないんかい！」ミナオは続けざまにツツコミをいれた。

「え…ええ、大丈夫ですか？」栗野原さんが困った感じに言った。「すいませ〜ん。」二人はそういいながら自重した。「ええ、それでは駅に向かいます。（汗）栗野原さんはそういうと、商業施設側の駅口からエスカレーターにのり、改札を抜けて駅構内へと向かった。

——3番のりば——

「来てしまった…。」ミナオは「ズズーン」と

（「——」？　な顔になりながら言った。

「私は楽しみです。知り合いさんが電車を運転し、それに乗るなんて人生でなかなかないじゃないですか〜！」千代は元気よく言った。

「あのなあ〜、他人事と思って…。」ミナオは更に落ち込みながら言った。

その時・・・

JR西日本関西地域神戸線女性アナウンス

「間もなく、3番乗り場に折り返し、回送電車が参ります。ご注意ください。3番乗り場に電車が参ります。ご注意ください。」
神戸線接近メロ~~~~~

ミナオ「いよいよ来た~~~~!!」

すると、かの山陽地方で有名な115系が来た。

「*画像参照」

ここからいよいよ、ミナオの実技が始まる!!!!!!

第9話 養成開始（後書き）

次回…

実技……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945w/>

木苺パニック！

2011年12月13日19時58分発行